書評・Book Review

魚類学雑誌
45(1): 51-52

日本の希少淡水魚の現状と系統保存—よみがえれ日本産淡水魚—. —長田芳和・細谷和海（編）. 1997. 緑書房. 東京. 379 pp. ISBN 4-89531-505-3. 9,800円.

本書は1994年4月1日に東京水産大学で開催された日本魚類学会サテライト研究集会「日本の希少淡水魚の現状と系統保存」の11講演を基に，新たに16人の執筆者を加えた27人の著者による30篇からなる．4章からなり，第1章（15篇）では，絶滅した3種（クニマス，スワモロコ，ミナミトミヨ）および14の希少淡水魚（種あるいは分類群）について，生物学的特徴，分布・生息の現状，絶滅や減少の要因，保護への提言が行われている．第2章（8篇）では、希少淡水魚あるいは広く淡水魚の保護の一環としての技術的側面，河川や水質の管理，人為的制御による遺伝資源の保存法が扱われ，第3章（5篇）では，市民レベルと行政レベルにおける希少淡水魚の保護についての考え方とこれまでの実績，今後の取り組みを扱っている．第4章（2篇）は，第1-3章で個別に扱われていたものを総括している．さらに，付表として環境庁版レッドデータブックと水産庁版野生生物基礎資料における希少淡水魚の危急度ランク（汽水魚も含む）が併記され，巻末では，関連する用語を集めて解説している．

本書の特徴は，著者の構成から明らかな如く，大学，研究所，博物館，行政機関（環境庁，水産庁，建設省），市民団体，と幅広く，官民一体となって希少淡水魚保護の問題点を具体的かつ多角的にとらえていることである．10数年前，ニッポンバラタナゴの保護活動に参加した当時を振り返ってみるとき，本書のような性格の本に，たとえ個人の資格としてでも，本省の行政にたずさわる人が執筆することなど想像だに出来なかった．時代もずいぶん変わったものと再認識させられた．とはいえ，希少淡水魚の現状が決して改善に向かっているわけではなく，むしろ，悪化の道をたどっていることは本書を一読されれば明白である．本書を読めば読むほど，希少淡水魚の保護は単に技術面だけではなく，それを支える人的体制，長期にわたる精神的忍耐に至るまで，誠に難しい問題であることが分かる．このことは，以下に引用する第4章(p. 346–347)の長田の一文ににじみ出ている：「…研究者が現在の川と生物を調べて，各種の好む水深・流速・底質などを細かく数値化したとしても，その努力に見合うだけの上等な川が生まれるだろうか．それらのデータを得るための時間と労力と費用を考えると気が遠くなる．…それらのデータが得られたとしても，それらの条件を河川内で実現できなくてはいけない．そしてその条件が長期にわたって維持されなければならない．…野生生物の生息環境に関しては、科学的なデータ（川でみればある時点のある地点における測定値）よりも経験によるイメージの方が優先するように思えてならない．そして，試行に試行を重ねる粘り強さが肝要である．それが実現するかどうかは，施行する側（行政と土木業者）と希望する側の双方の熱意にかかっている．その熱意は以前に比べると双方とも強まっているように思われる．ただ後者（地元民）の希望や意見の集約はなかなか難しく，いきおい，マニュアルはないかと探したり，専門家に聞こうということになる．しかし，実はすべての地域で使えるマニュアルはないし，専門家もいない．…」

著者は多人数にわたり立場も様々であるが，構成コンセプトに一貫性があるため，濃密な内容にもかかわらずアプローチし易い本に仕上がっている．この点は編者の力量と熱意に敬意を表したい．研究者にとって第3章はおおいに役立ち，また，行政サイドでは，「わんど」の重要性で象徴されるように，第1–3章の希少淡水魚の現状，研究者や市民団体による魚類の立場にたった多様性に富む河川管理や水質管理などは大変参考になると思われる．市民団体にとっても本書の有用性は言うまでもない．環境問題に関心が高まりつつある現状を反映して国内外に多くの類書を見かけるが，研究者サイドのものが多い中で，本書の取り組みは新鮮である．

本書の欠点を探すとすれば，第4章の内容を最初の章にもってくることによって，まず最初に全体の概観，そして個別の展開へという形にした方が，読者にとって分かり易かっただろう．

なにはともあれ，豊富な内容を限られたスペースで紹介しきれないので，30篇のタイトルと著者を以下に示す．魚類に限らず，自然保護に関心のある人に一読を勧めたい．

第1章　希少淡水魚の現状

1 日本の希少淡水魚（細谷和海）　2 イトウ（小宮山英重）　3 リュウキュウアユ（四宮明彦）　4 アリアケヒメシラウオ（田北　徹）　5 ヒナモロコ（木村清朗）　6 ミヤコタナゴ（望月賢二）　7 ニッポンバラタナゴ（長田芳和）　8 イタセンパラ（田中　晋）　9 アユモドキ（片野　修）　10 シナイモツゴ（高橋清孝）　11 ウシモツゴ（前畑政善）　12 ネコギギ（渡辺勝敏）　13 ハリヨ（森　誠一）　14 ムサシトミヨ（高野昌宏）　15 ハゼ類（岩田明久）

第2章　系統保存の技術的展開

16 川魚との共存をめざす河川管理（丸山　隆）　17 魚がすみよい水質管理（川合真一郎）　18 淡水魚の繁殖場所としての一時水域（斉藤憲治）　19 水族館における希少淡水魚の保存と今後の課題（前畑政善）　20 淡水魚地方個体群の遺伝的特性と系統保存（酒泉　満）　21 PCR法を用いた希少淡水魚の遺伝子増幅法（小林敬典）　22 精子凍結による系統保存（太田博己）　23 バイテク技術を用いた希少種の保存と絶滅後の復活（小野里　坦）

第3章　保護活動と行政

24 市民レベルでの淡水魚保護活動（坪川健吾）　25 天然記念物指定の希少種とその保護（池田　啓）　26 種の保存法と自然保護行政（小林　光）　27 水産庁の希少水生生物保護対策（佐久間　徹）　28 川魚との共存をめざした河川行政（小俣　篤）

第4章　系統保存の方向性と課題

29 生物多様性を考慮した淡水魚保護（細谷和海）　30 淡水魚の減少要因と回復への道（長田芳和）

（新井良一　Ryoichi Arai: 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
45(1): 52

□ 魚類学一般

Deep-sea Fishes. —D. J. Randall and A. P. Farrell (eds.). 1997. Fish Physiology Series 16. Acsademic Press, London. xvi+388 pp. ISBN 0-12-350440-6. Fish Physiologyシリーズの第16巻．深海魚のさまざまな生物学的側面を論じた計9つの論文からなる．その道の専門家には向いてないが，門外漢の人が深海魚の知識を得るには便利な本．　(MM)

□ 分類学・進化学

Species: The units of Biodiversity. —M. F. Claridge, H. A. Dawah and M. R. Wilson (eds.). 1997. The Systematic Association Special Volume Series 54. Champan & Hall, London. xvi+439 pp. ISBN 0-412-63120-2．種に関する実践的な側面と哲学的な側面を扱った論文計19篇からなる総説集．魚類における種の問題を扱った論文はないが，海産無脊椎動物における種 (N. Knowlton)，保全生物学における種 (J. Cracraft)，理想的な種概念 (D. L. Hull)，種概念の階層性 (R. L. Mayden)等の問題を取り上げた論文は読み応えがあるし，近年の種をめぐる論争を知るうえでたいへん有用な本．　(MM)

生物系統学．—三中信宏．1997．東京大学出版，東京．xiv+458 pp. ISBN 4-13-060172-5. 5600円．日本語で書かれた初めてのまともな生物系統学の本．入門書ではないが，本書を読みこなせればもう系統学で怖いものはない．今後は我が国でも，本書を出発点に健全な系統学の発展が望める．　(MM)

□ 魚類生態学

水産動物の成長解析．—赤嶺達郎・麦谷泰雄（編）．1997．恒星社厚生閣，東京．122 pp. ISBN4-7699-0855-5. 2300円．1997年4月に開催された日本水産学会春季大会でのシンポジウムをまとめたものである．水産動物の成長解析の基礎となる年齢形質に関する最新の技法と情報，成長理論と解析法，およびシャコ，サメ・エイ類，スケトウダラ，サンマとマダラなどを対象動物とした成長解析や成長様式の実例が紹介され，生態や資源解析に興味のある者に参考となる一冊．(AG)

□ その他

Marine Biodiversity: Patterns and Processes. —R. F. G. Ormond, J. D. Gage and M. V. Angel (eds.). 1997. Cambridge Univ. Press, Cambridge, U.K. xxii+449 pp. ISBN 0-521-55222-2．海洋における生物多様性をさまざまな角度から論じた計18篇の論文からなる総説集．深海から沖合，沿岸まで考えられるかぎりすべての海洋環境における生物多様性を網羅しているので，たいへん便利．　(MM)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
45(1): 52–54

中村守純先生を悼む
Memories of Dr. Morizumi Nakamura (1914–1998)

中村守純先生が1998年1月19日逝去された．先生は，1990年脳梗塞のため入院，その後回復されて自宅でリハビリに励む毎日であったが，1995年嚥下障害のため再入院，さらに1997年2月三度めの入院加療中肺炎を併発し，ついに帰らぬ人となった．享年83歳であった．

駒込生まれの駒込育ち，駄のつくほどのシャレ好きで口が悪い，巨人大鵬卵焼，ビールはサッポロ，昼はかつ